



自然に左右される仕事。農業ももちろんそうだけど、漁業はホントに自然任せの部分が多い。今号は、そんな漁業のお話です。

「今度生まれ変わったら、漁師がいい!」。NHK大河「徳川家康」など数々のドラマに出演された俳優の「滝田栄」さんが酔った時によく話してくれることです。一番尊敬できる職業の一つが漁業だと話してくれます。私も全く同感。生まれ変われるのなら、東京ではなく、厚内や十勝太で生まれ育ってみたいです。当たり前のように海に囲まれ、漁師としての親の仕事ぶり、生き方に触れながら、成長していく。そんな人生だったら、もしかして今とは逆で都会に憧れ札幌や東京に住みたいという思いを持つのかも知れない。でも、どんな生き方を選ぶにしろ、漁師である親を尊敬する気持ちはきっと持つだろうな。と厚内や十勝太の漁師の人たちを見ていたら、そう思う。

今回の写真は、厚内の秋鮭定置網の船で働いている漁師たち。漁は8月下旬からのスタートだけど、その準備はすでに始まっている。定置網を固定する型を作る作業をしていたけど、この時期の太平洋は、季節特有の「ガス」が発生しやすく、作業をより困難にしていた。海の上にいると、ほんとうに人間は無力だと感じる。自然の一部としての実感が一番強く感じるができる場所だ。今でこそ、事前に天気はある程度予想できるし、レー



ダーやGPSなど計器が進歩したことにより事故は少なくなってきたけど、昔はほんと大変だったと思う。まだ港がなく、砂浜から船が出入りしてい

た時代のお話をよく年輩者から聞いた。船が転覆して死者を出した事故の話などを聞くと、自然の前では人間はほんとちっぽけな存在だと気付く。大気汚染や水質汚濁、様々な公害を引き起こしてきた人間だけど、台風の進路を変えることは到底できないし、天候を調整することはできることではない。どんなに科学が進歩したって、自然に委ねての生活が基本。都会にいたら、忘れがちなそんな当たり前のことを思い出させてくれる一番の場所がきっと海なのではないだろうか。

魚を捕るという漁業という職業がありながら、「魚釣り」=「フィッシング」という娯楽が存在することは、とても面白いと思う。釣り糸を垂れて、いつ釣れるのか分からない魚をじっと待つ。魚釣りは、釣れるかどうか分からないから面白い。だから釣れた時の喜びは格別なものとなる。自然に委ねて過ごす釣りをしている時間は、人間本来の姿に帰れるそんな時間なのかもしれない。そんな「魚釣り」を好むという人が多いということを考えて、それをうまく応用していけば漁業自体にすごい付加価値が付くのではとよく考える。

浦幌の魅力を引き出すきっかけは、厚内、十勝太にもたくさんある。なにより、そこに暮らす人たちが一番の魅力だと今回あらためて思いました。

自然の中で命がけで働く漁師の姿はほんとカッコイイ。

カツコイ 人・顔・仕事!

写真・文／おうみ まさたが近江 正隆

表紙は、ふるさとの夏まつりでヒップホップダンスやバンド演奏、仮装盆踊りに参加する高校生や小学生の表情で飾りました。実は、このヒップホップダンスに子どもが出てました。春から習い始め、初舞台でした。「どうせ、踊れないべ」と思っていたのですが、想像に反し、結構まとも（親バカです）。子どもの成長はスゴいと感じると共に、成長するのは体重だけで、あとは退化していく一方の自分。どーすれば成長を止められるのか、ビールを飲みながら、毎晩考えています。（やす）

掲載された写真は、差し上げますので（本人または家族）お気軽にご連絡下さい。

給食の一時休止による給食費の取扱い

学校給食の一時休止に伴う給食費の取り扱いの通知が来ました。給食費の取扱いは食材発注済のため通常とおり徴収との文章ですが、その食材はどうされましたか！が足りません。

悪く考えると・・・

発注した食材の取扱いについて給食センターに聞きしました。

給食センターの蒸気ボイラーが故障し、3日間、学校給食を休止しました。発注した食材のうち、牛乳のみを休止期間中に供給し、その他の食材については、給食再

開後の食材として、給食メニューを替え使用しました。

給食費は、毎月一定額をご負担いただき、増減については年度末に調整しています。



屋外で給食を食べる子どもたち。

皆さんの率直な「声」をお聞かせください。お寄せいただいたご意見やご提案は、担当する部署にお届けし、町政への反映を図っていきます。

男女共同参画。最近よく耳にしますが、言葉が硬いせいか難しそうな印象を受けます。実はこの男女共同参画は、私たちの生活に深く関わっている問題なのです。そんな身近な話題をシリーズでお届けします。

さて、皆さんは普段夫婦茶碗を使っていますか？この夫婦茶碗や夫婦箸、どうして女性用は男性用のものより小さいのでしょうか。

実は、これらのサイズは江戸時代の人間工学とも言える「決まり寸法」という考えに基づいて作られたものなのです。「決まり寸法」では、茶碗の口径は身長約8%が手になじんで使いやすいサイズとされ、平均身長から男性用茶碗の口径は12センチ、女性用は11・4センチとなりました。箸の長さも同様、身長比から割り出されています。親指を直角になるまで横に開いたときの親指と人差し指の寸、これを人咫（ひとあた）といい、身長約10分の1の長さとなります。箸は人咫の1・5倍が最適な長さなのだそう。女性より男性より控えめに食べなさい」という考えで、サイズを小さくしたものではなかったのです。

食事は生活の基本。自分にあったサイズのお茶碗や箸を使うことがおしい

い食事につながります。現代の日本人は、江戸時代よりも平均身長が伸びていますので、昔のままの決まり寸法ではちよつと使いにくいかもしれせん。茶碗や箸を選ぶときは、自分で実際に持ってみて使いやすいさをチェックしてみよう。男女に関わらず自分で使いやすい茶碗や箸のサイズがその人の「決まり寸法」ということです。

男女共同参画も「男女が性別にかかわらずなく」という言葉がよく登場しますが、決まり寸法のような自分のサイズ、気持ちを尊重し、他の人のサイズも大小さまざまであることを認める社会を目指すものなのです。

男女共同参画コラム vol.1

